小学校

平成7年度

教育研究員研究報告書

図画工作

東京都教育委員会

平成７年度

教育研究員名簿（図画工作）

分科会	地区	学校名	氏名
A分科会	目黒区	東根小	三澤裕子
	北区	稲田小	南育子
	練馬区	光が丘第二小	油井ゆかり
	府中市	武蔵台小	大杉健
	町田市	南第一小	中川千加士
	小平市	小平第三小	△気田敬三
B分科会	江東区	平久小	大道博敏
	大田区	小池小	山田和也
	世田谷区	八幡小	吉田晃
	渋谷区	代々木小	○和久山眞利子
	杉並区	桃井第四小	坂田知歌子
	板橋区	赤塚新町小	大井清己
	足立区	千寿第三小	○藤島久子
	葛飾区	西小菅小	◎濱口行雄

◎全体世話人　○全体副世話人　△分科会世話人

担当　教育庁指導部初等教育指導課指導主事　岡本昌己

目　　次

Ⅰ　研究主題 …… 2
1　研究主題設定の理由 …… 2
2　研究構造図 …… 3

Ⅱ　Ａ分科会報告 …… 4
1　Ａ分科会の概要＜直感力や感覚を刺激する題材の工夫＞ …… 4
2　その他の実践事例 …… 5
3　実践事例 …… 6
(1)　「からふる・ふりふり」 …… 6
(2)　「わりばしパワー」 …… 8
(3)　「クねっ！クにゃっ！クリスタル」 …… 10
4　主題に迫るための視点一覧表 …… 12

Ⅲ　Ｂ分科会報告 …… 14
1　Ｂ分科会の概要＜想像力と構想力を発揮する題材の工夫＞ …… 14
2　その他の実践事例 …… 15
3　実践事例 …… 16
(1)　「メイド　イン　パリッ　パリッ」 …… 16
(2)　「１０才の指で水を表す」 …… 18
(3)　「はってはって，やぶいてやぶいて」 …… 20
4　主題に迫るための視点一覧表 …… 22

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題 …… 24

＜概　要＞

本研究は，子供たち一人一人が個性を生かし，表現の喜びと楽しみを味わうための指導法の工夫を研究の主題に据え，「直感力や感覚を刺激する題材の工夫」と，「想像力と構想力を発揮する題材の工夫」の二つの視点から学習指導の在り方を追究した。

また，二つの分科会では実践を通じて，「主題に迫るための視点一覧表」としてその概要をまとめた。

Ⅰ　研　究　主　題

一人一人が個性を生かし，表現の喜びと楽しみを味わうための指導法の工夫

1.　研究主題設定の理由

図画工作の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して，造形的な創造活動の基礎的な能力を育てるとともに表現の喜びを味わわせ，豊かな情操を養う。」である。

この目標の実現を目指して日々の教育活動を進めているが，これからの社会の変化や価値の多様化を考えるとき，図画工作においても子供一人一人がもつよさや可能性を十分に発揮させるとともに，豊かな創造力や表現力を育成し，自分たちをとりまく様々な環境に柔軟に対応することができる態度や能力を身に付けさせることが必要である。

教師は上記のことを常に念頭において子供の側に立った指導を行う必要がある。

さて，子供は，いつの時代にあっても，自分の思いを絵に描いたり，材料でつくったり遊んだりしたいという要求をもっている。このような要求や興味に満足し，表現の喜びや，楽しみを味わうことができると，子供の内面からさらに豊かな表現意欲がわいてきて，目の前の素材と向き合った時に，どう生かそうか，どう表現しようかなど思いを巡らせることができると考えられる。

その表現意欲がその子供の個性を引き出し，活動や行為を通して作品として表出してくる。その繰り返しによって，子供が創造力を高め，より個性を発揮し，表現する喜びと楽しみを味わうことができると考え研究主題を設定した。

そこで大切なことは，教師が常に子供の欲求やそれにかかわる経験などについて配慮して題材設定を行い，指導の過程においては，それぞれの子供の表現の仕方について多面的に理解しようと努めることである。具体的には，現代の子供の感性に合った題材や素材の検討，子供の表現したことやものを大人の枠にはめ込むことのないようにすること，そして，それぞれの子供のもつよさを発見し認めようとする態度などであると考えた。

以上のような基本的考えのもとに，「一人一人が個性を生かし，表現の喜びと楽しみを味わうための指導法の工夫」の主題に迫るため，子供がもっている瞬時に感じることができる能力である直感力や感覚についての研究と，子供が自分の思いや願いを計画的，意図的に表現することができる能力である想像力と構想力についての研究を通して題材の工夫を行うことが大切であるととらえ，次の二つの分科会テーマを設定した。

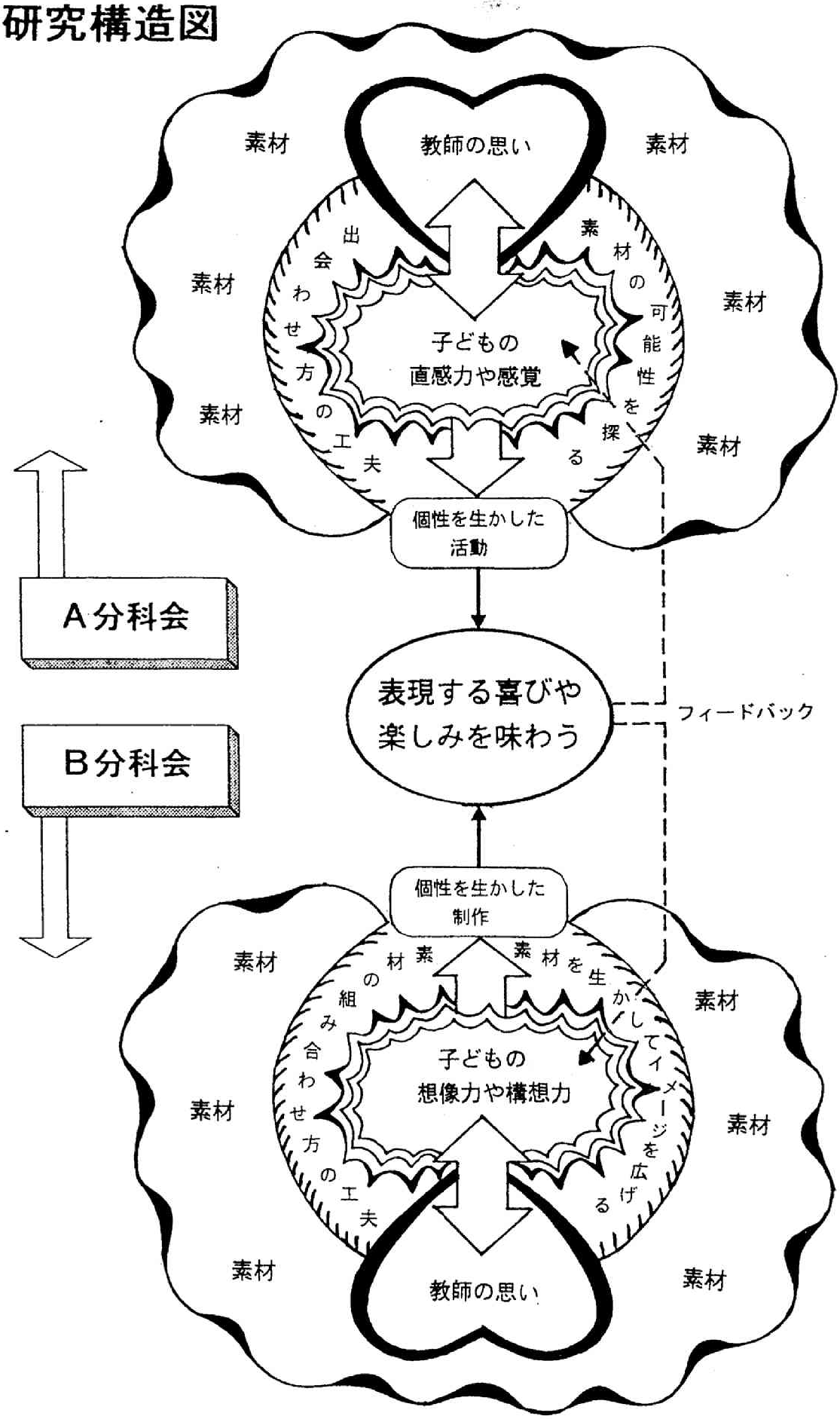
A分科会テーマ　「直感力や感覚を刺激する題材の工夫」

・素材の可能性を探る　　・素材との出会わせ方の工夫

B分科会テーマ　「想像力と構想力を発揮する題材の工夫」

・素材の組み合わせ方の工夫　　・素材を生かしイメージを広げる

研究構造図


素材
教師の思い
素材
素材
素材
素材
素材
素材
出会わせ方の工夫
素材の可能性を探る
子どもの
直感力や感覚
個性を生かした
活動
A分科会
表現する喜びや
楽しみを味わう
フィードバック
B分科会
個性を生かした
制作
素材の組み合わせ方の工夫
素材を生かしてイメージを広げる
子どもの
想像力や構想力
素材
素材
素材
素材
素材
素材
教師の思い

Ⅱ　A 分 科 会 報 告

サブテーマ

直感力や感覚を刺激する題材の工夫

・素材の可能性を探る

・素材との出会わせ方の工夫

1.　A分科会の概要

子供たちは様々な素材の中で生活している。それらの素材は多様な表情をもっている。A分科会では，それら多くの要素の中から一つの要素を強調して，よりシンプルに，よりダイレクトに素材と子供たちを向き合わせた。そのことにより，子供たちの直感力や感覚を刺激し，表現欲求を膨らませ，創造力や自己表現力を引き出すことを目指した。

また，題材を設定するに当たり，過程を大切にし，素材がもっている様々な可能性を探り，その素材と子供との出会わせ方を工夫することにより主題に迫る研究方法をとった。

＜素材の可能性を探る＞

①どの子供も取り組めるような，技能的に扱いが容易な素材

②感覚的なもの，感触的なもの（空間・皮膚感覚etc.）をベースにした素材

さらにA分科会のサブテーマに迫るために，上記の２点を具体的な条件として取り上げ，素材を決定することにした。①については特に素材そのものに目新しさを求めるのではなく身の回りにある素材を扱い，②の項目に関しては，教師側のその素材に対する思いが生かされたものであることも大切な要素としてとらえることにした。

＜素材との出会わせ方の工夫＞

①子供の感覚を直接的に刺激することを目指した導入時の出会わせ方の工夫

②子供が，次に「やりたくなるような行為」などが自然に見えてくるような場の設定や授業展開の工夫

授業の導入段階において教師側からの投げかけは，その後の展開に大きく影響してくる。子供の感覚を直接的に刺激するためにその導入時においては，極力，説明的な要素を省き，子供がダイレクトに素材と向き合えるように要素を絞った提示の仕方を試みた。また，その後の子供の活動を展開させていく段階においては，個性を生かせるような様々な発展を期待するために，場の設定の工夫や行為そのものがある種の必然性（子供の自然な要求が現れた結果としての行為）をもつ必要があると考えた。さらに，よりその行為から受ける刺激をインパクトのあるものにするためには，一瞬の変化などの展開方法も必要になってくるケースなども考慮して研究を進めることにした。

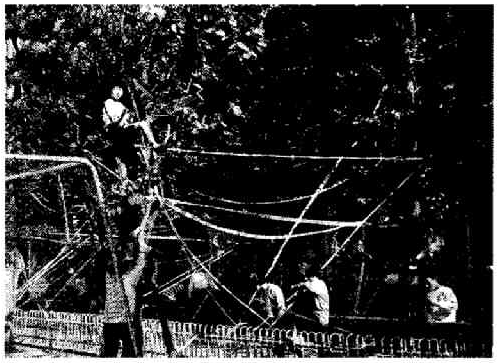
2. その他の実践事例

A分科会では，次ページ以降の授業報告のほかに主題に迫るために，さらにいくつかの授業研究を行った。

3年　きょうは「－｜／」　　指導：練馬区立光が丘第二小学校教諭　油井　ゆかり

ある時，子供たちが遊びの中で楽しそうにホッチキスを打っている姿を見ていて，打った針跡が意外なリズムをもっていることに気が付いた。キラキラ光るホッチキス針の視覚的刺激によってより一層楽しみが増え，スチレンボードを打ち抜く抵抗感のある感触的な刺激によって今までに味わったことのないふしぎな感覚を楽しめる。それによって子供たちの新しい表現の意欲を引き出そうと考えた。

3年　カラーテープたんけんたい　　指導：府中市立武蔵台小学校教諭　大杉　　健



この題材では，普段行われている造形遊びの授業をA分科会のテーマに合わせた導入・展開を試みた。扱う素材は裏山の自然の立木，カラーテープである。それらの素材とダイレクトに向き合うために，「基地を作ろう」とか「クモの巣をはろう」という具体的な投げかけは行わず，立木にビニールカラーテープでいくつかのマーキングを行い，子供たちは「黄色→上の赤→遠い白→右の緑→黒」などとランダムに書かれた暗号カードを引き，その暗号を解くというゲーム的な導入を行った。その結果，大きな空間の移動が子供たちには無意識に行われ，張り巡らされた色とりどりのカラーテープによって様々な感覚を呼び起こすことができた。また，具体的な投げかけを行わなかったために張り巡らしたテープを切断する新たな活動の展開が生まれ，空間を開放していく感覚も味わうことができた。

4年　ガム・ガム　　指導：町田市立南第一小学校教諭　中川　千加士

版木に白いガムテープを適当な大きさにちぎって貼っていく。ある程度貼られた時点で墨を塗り，さらに布で拭き取ってモノトーンの画面を作り出す授業を行った。何を作るかは言わず，「ガムテープをちぎって敷きつめよう」の一言で作業を開始した。端から順に貼る子供，中央に細かく集中的に貼る子供，何らかの形に貼る子供，細かい作業の繰り返しにより子供たちに心の揺れや形に対するこだわりが見え始め，個性的に活動を展開していった。墨を付け画面を白から黒へと視覚的に変化させたことは，戸惑いから喜び（驚き）への心の変化も大きく，造形的な感覚を十分に刺激することになった。

3. 実践事例（A分科会）

(1) 題材名　「からふる・ふりふり」　　低学年（第1学年）

1　題材設定について

素材と子供とのかかわりから

・子供たちはほとんどボンドを使ったことがない。そこで，本題材ではボンドに直接触れ，その粘性を感じる活動を考えた。また，固まったボンドの感触や，透明になる視覚的な変化も楽しませたいと考えた。

・クーピーは本来，絵を描くときに使う物だか，子供たちは，削ってのりに混ぜたり，透明粘着テープに貼ったりして遊んでいる。しかし，削りすぎて注意されることもあり，思い切りやったことはない。そこで本題材では，クーピーを造形の素材として削り，白いボンドの上にふりかけることにより，削る時の手ごたえを感じたり，ふりかける時の色の変化を楽しんだりできる活動を考えた。

2　ねらい

・ボンドの粘性や，クーピーを削る手ごたえを感じる。

・クーピーをふりかける時の色の変化を楽しみながら，造形活動をする。

・ボンドがゆっくりと固まりながら透明になる様子から，視覚的な変化を楽しむ。

・固まったボンドを剝がしながら，その感触を味わう。

3　材料・用具

材料　ボンド　クーピー

用具　ビニールシート　鉛筆けずり

ボンドを広げる
ネトネト・グチャグチャ

クーピーを削る
シャリシャリ・パラパラ

クーピーをふりかける。
パラパラ・パラパラ

クーピーとボンドをまぜる。
グチャグチャ・ベトベト

4　学習の流れ（2時間）

	子供の活動	活動	教師の働きかけ
一次 本時	・ビニールシートの上にボンドを広げる。 ☆ボンドの粘性を感じる。 ・好きな色のクーピーを削る。 ☆削る手ごたえを感じる。 ・いろいろな色をふりかける。 ☆色の変化を楽しむ。	・ボンドを広げる。 ・クーピーを削って，ふりかける。 ・ボンドを乾かす。	・ボンドを広げて見せ，興味がもてるようにする。 ・ボンドを配る。 「おたまでたっぷりね。」 「今日は思いきり削っていいよ。」 「クーピーをふりかけよう。」 ・ふりかけ方や，かき混ぜる等は自由にできるようにする。
翌日	・ボンドの変化を見る。 ☆透明になる様子を楽しむ。	・ボンドを剝がす。	
二次	・ボンドを剝がす。 ☆固まったボンドの感触を味わう。 ☆視覚的な変化を楽しむ。		・ゆっくり剝がす。 ・裏からも見られるようにする。

評価　・ボンドの粘性や，クーピーを削る手ごたえを感じることができたか。
・ふりかけたクーピーの色の変化を楽しみながら活動できたか。
・ボンドが固まる様子から，視覚的な変化が楽しめたか。
・固まったボンドの感触を味わえたか。

5　考察

ボンドを広げた時にはベトベトする粘性を感じ，楽しんだようだった。この感触が気に入ったのかクーピーをふりかけた後，再びボンドをかき混ぜた。翌日，ボンドは透明になっていた。子供たちはクーピーの色がよく見えない位かき混ぜたのにきれいに見えていることに驚いていた。持ち上げて裏から見ようとした子供もいた。クーピーを削る時には手ごたえも感じたようだったが，丸まって出てくる様子に興味をもった。

また，ボンドの上にふりかけた時の色の変化や美しさも楽しんでいた。本題材では素材の特性を感じ楽しみながら活動ができた。しかし，活動中に見られた個々の活動（丸まったクーピーを立てて置く，粉々にしてふりかける，配色を考えてふりかける等）は最後に皆でかきまわしたので消えてしまった。今後は，各自の活動の範囲を明確にするなど個々の行為がどのようなものであったかが残る活動の方法も考える必要がある。

(2) 題材名　「わりばしパワー」　　中学年（第４学年）

1. 題材設定について

表現したいという思いは，子供だけでなく教師の中にも同じように存在している。この「思い」は，人間のもつ直感，感覚，感情，思考といった根源的な機能として存在する。Ａ分科会では，直感力という未分化な機能を中心にすえ，人間の外部に存在するエネルギーを内部に取り込むことにより，子供一人一人に潜在する，様々な能力を引き出したいと考えた。さらに，そのような活動の中で，子供一人一人が自らの感覚として表現する力というものを実感していくことが表現の楽しみや喜びとなるだろうと考えた。

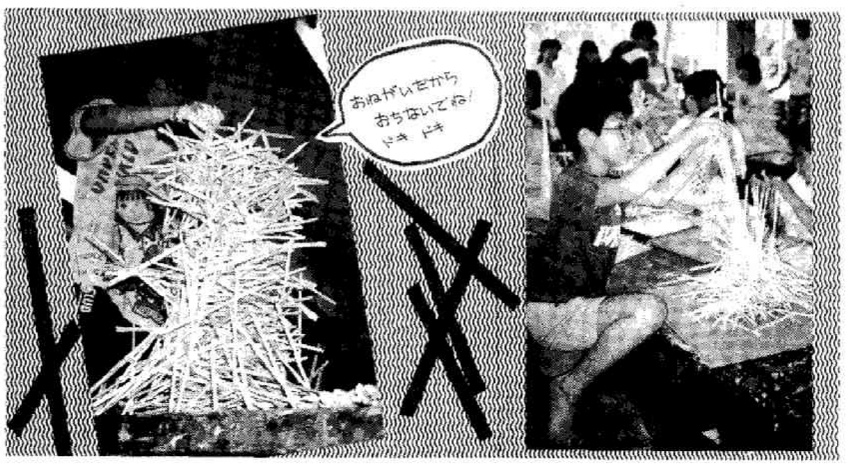
子供自身の生身の体が，ものや空間と出会うとき，子供たちの表現欲求を刺激する何かが介在すると考えられる。これらは目には見えないが全身に走る感覚であり，言葉には置き換えられない行為として表現活動のエネルギーに結び付いている。そこには分析的な思考ではなく，直感的な思考が強く働いていると思われる。

また，子供たちの表現の世界（小宇宙）は，表層的な記号やイメージの単なる再現の世界ではなく，言葉では説明しにくい混沌とした世界の中に存在すると考えられる。

そこは子供ともの（空間）とが発する振動（バイブレーション）にみちているとも言えるだろう。ところが指導をする側の教師には，そのような子供の表現の世界にすばやく，そして直感的に感応できているのだろうか。このような疑問と反省に立ったとき，教師自身の中に存在している感覚を覚醒させ，子供との間に感覚と感覚の交信を密に交わさなくてはならないだろう。

そこで，本題材では，素材の可能性をさぐることや素材との出会わせ方を工夫することにより，子供一人一人の直感力や感覚を刺激する授業の展開を通して上記の考えについて検証することにした。

ここでは，わりばしという素材をあらかじめ設定されたものを組み立てるための材料としてはとらえていない。子供を大量のわりばしと木工ボンドに直に向き合わせ，それらの素材を重ねたり積んだりする行為や，その中で生じる構成感覚や空間性を十分に感じ取り味わう中から，子供の内面に自分本来の感覚を生じさせることをねらいとした。子供たちがわりばしという素材と向き合い，それらを内部に取り込み，ある種の抵抗感を感じ取ることにより，それらを乗り越えていく過程の中で表現活動の楽しみや喜びを見つけられたらすばらしいと考えた。



2. ねらい

・素材（わりばし，木工ボンド）に触れ，その感触を味わう。

・直線と直線の中に生まれるバランスや緊張感を体感する。

・わりばしを合体させながら生まれる形，変化していく形のエネルギーを感じる。

3. 材料・用具

わりばし，木工ボンド，板段ボール，カッターナイフ

4. 学習の流れ（2時間）

＜子供の活動＞	感覚の交信	＜教師の思い＞
・大きな段ボールから自分の土地を作る	土地を分ける	・母体としての地に生まれる ・自分とのつながりを意識する ・適当から始まる造形への開放
・わりばしを各自，思い思いの方法で積んでいく ・つなげたい，付けたい気持ちをもりあげる ・変化し，立ち現れる物体のパワーを感じる	わりばしパワーを集める	・線と線の重なり合う美しさから子供の表現欲求に刺激を送る
	わりばしパワー ＋ ハンドパワー ↓ わりばしタワーに向かう	・積み重なるわりばし，組まれたわりばしから送られるパワーを感じる ・物理的バランスには方向性，規則性のようなものがあるが，子供の造り出すバランスは既成の概念を超えたパワーを生む
・バランス感や緊張感などにドキドキしながら挑む	わりばしパワーを楽しむ	・次々に現れるわりばしタワー，個々の作品が交信し合い，空間をゆるがすパワーが生まれる

5. 考察

子供の表現の実質は，できあがった結果の作品を既成の枠組みでくくり分類することよりも，活動の過程の中でくり広げる子供たちの多様な表情の中に存在すると思われた。大人の概念では付くはずのない形が現れ「お願い，付いてね」という子供のつぶやきや，立てるという課題を自分で立て，その緊張感を乗り越えるための「手」の動きが現れ，自分で「カッコイイ」と思わずつぶやく子供もいた。誘われるように素材や形に反応し体が伸び上がり，ついにはイスに乗り，机の上に立ち上がるなど，視点が移動していく子供もいた。そこには，ものや空間にかかわる子供たちのいろいろな姿があった。このような子供の心の振動をどのように感じ取ることができるのか，教師自身の感覚が問われているように感じられた。

また，今回は段ボールの土台を設定したが，直に床に展開することで横の広がりをもつ可能性も考えられる。この題材において，子供の表現の輝きは結果だけでなく過程にも存在していることを改めて実感した。

(3) 題材名　「クねっ！クにゃっ！クリスタル」　　高学年（第６学年）

1. 題材設定について

変化するということは，子供が興味をひかれることの一つであると思う。高学年になると単に変化に興味をひかれるのみでなく，変化の仕方を観察し，法則めいたことを見つけて，さらに利用していく子供も出てくる。そこで，子供の日常の生活では体験することの少ない熱による変化を体験し，溶けることによる動きや，できた形により直感力や感覚に刺激を受け，多様な創造力をわき立たせ自己表現力を高めることができるようにしたいと考えた。

2. ねらい

・ビニールなどの素材が熱で変化していく様子を楽しみ，発想を広げる。

・偶然の変化や形から，さらに次の活動を展開する。

3. 材料，用具

・ＯＨＰシート，透明な卵パックなど熱で溶けるパック類，荷造りテープｅｔｃ・・・

・ヒートガン，ホッチキス，軍手，

4. 学習の流れ（１時間）

(1) ＯＨＰシートなどを，ヒートガンの熱で変化させる。　・・・１５分

(2) 熱による変化を使って，自分なりに活動を展開する。　・・・３０分

時間	子供の活動や反応	教師の働きかけ
5分	・ものが熱せられて変化する様子を見て興味をもつ。	・ＯＨＰシートに，荷造りテープをホッチキスで止め，ヒートガンで熱して変化する様子を見せる。
10分	・ＯＨＰシートに，荷造りテープをホッチキスで止める。軍手を付けて，ヒートガンで熱し変化させてみる。	・「熱風に十分注意をして，実際にやってみてごらん。」と助言する。
25分	・ＯＨＰシートに，用意してあったりもってきたりしたものを付け，熱して変化させ，さらに付け方，熱し方など工夫して思い思いに変化させてみる。	・「他のものを熱するとどのように変化するだろうか。ＯＨＰシートにホッチキスで止めていろいろ試しながら，思い思いに変化させてみよう。」と助言する。
5分	・いろいろなものの，いろいろな変化を見たり，話し合ったりしてみる。	・「いろいろなものが熱で変化して，どうなったかな。他の人の変化も見たり聞いたりしてみよう。」と助言する。

評価

・ビニールなどの素材が熱で変化していく様子を楽しみ，発想を広げたか。

・偶然の変化や形から，さらに次の活動を展開することができたか。

留意点

・子供の興味・関心から子供自身が発想を広げ，活動を展開できるように，教師は必要最小限の実演，言葉かけにとどめる。

・ヒートガンの先に触れない，人に向けないことや，材料の押さえ方など十分に注意する。

5. 考察

素材が熱で変化していく様子に，子供たちは興味をおこしていたようである。はじめの頃は怖がっていた子供もいたが，慣れるにしたがって熱風をあてる方向を工夫して動きを楽しんでいた。さらに色々な素材を用いてそれぞれの変化を利用し，次の活動を展開した。

(1) ＯＨＰシートなどを，ヒートガンの熱で変化させる。

ＯＨＰシートに，荷造りテープをホッチキスで止めて熱したが，クネクネと動き，溶ける様子に，何本もテープを付けたり，絡ませて熱したりして楽しむことができた。

(2) 熱による変化を使って，自分なりに活動を展開する。

プラスチックのカップの中に何種類かの材料を詰め込み熱する子，ＯＨＰシートを何枚も重ねて動きを楽しむ子，材料同士をくっつけている子，穴を開ける子・・・。それぞれの材料の溶け方の違いに気付き，違う溶け方の材料を組み合わせたり，一度溶かしてできたものに，さらに付け足しをしたりした。ヒートガンを近づけたり離したりして温度を操り，溶かしたり少し形を変えるだけにしたりなど，自分なりに工夫しながら活動を展開していた。熱風をあてすぎて煙を出した子供もいたので，安全面には十分注意する必要がある。

以上のことから，この題材は，直感力や感覚を刺激し，多様な創造力をわきたたせ，子供の表現力を高めることができると考えられる。さらに，この素材を他の題材に取り入れたり応用したりするなどの発展が可能である。

4. 主題に迫るための視点一覧表

題材視の点 ＼ 教材名	素材の可能性を探る	
	扱いが容易な素材	どのような感覚・感触を味わうことができるようにするか
からふる・ふりふり（1年）	ボンドをのばし，その上にクーピーを削ってふりかける	・ボンドの「ベトッ」という粘性のある感触 ・クーピーを削るときの「シャリシャリ」という抵抗感 ・パラパラとふりかけるときの色の変化 ・ゆっくりと固まりながら変化していく視覚的感覚，感触
カラーテープたんけんたい（3年）	自然の立木にテープをつないで，切る	・自然界がもつ空間の広がり ・カラーテープが立木に巻かれていく増殖感 ・自然とテープがかもしだす音，風の感触 ・いったん区切られた空間にテープを切ることによって起こる開放感
きょうは「－｜／」（3年）	スチレンボードにホッチキスを打ち込む	・ホッチキスを打ち込む時の「プッ」という抵抗感 ・ホッチキスの針の「キラキラ」という輝き
わりばしパワー（4年）	わりばしにボンドを付けて置く	・ボンドの「ベトッ」という粘性のある感触 ・ドキドキ，ハラハラするバランス感覚，緊張感
ガム・ガム（4年）	ガムテープ（白）をちぎってシナベニヤに貼る	・ガムテープを切るときの「バリッ」という感触と音 ・くっつくときの「ベタッ」という感触 ・墨汁による瞬間的な色や質感の変化
クねっ！くにゃっ！クリスタル（6年）	ホットガンでＰＰテープなどを熱して変形させる	・熱せられたテープやシートなどがくねっくにゃっと動きながらゆっくりと変形していく感覚

教師の思い	素材との出会わせ方の工夫		活動の展開
	素材との出会わせ方の工夫（導入時の工夫）	子供が活動を発展させるための場の設定や展開の工夫	どのように広げ深められたか
・普段，なかなかできないことを思い切ってやらせてみたい	・ボンドを広げて見せる ・粉をふりかけるときは「クーピーをふりかけよう」の言葉かけのみで自然の色の変化を楽しませる	・身近に作品をおき，白いボンドが透明に変化しながら固まっていく様子を見せる	・ボンドをこねまわすおもしろさ ・色の散らばり，まざり
・基地を作るとか，クモの巣を張ろうなどという具体物を目指した展開はしない ・自然発生的に生まれてくる多様な展開を期待	・自然の環境に出て「暗号を解こう」の言葉かけのみでその後は自発的な発展	・大きな空間をはじめに無意識に動き回ってしまうように暗号カードを用意	・色を変えて埋め尽くす ・テープを切る ・テープの切れ端を引きずる ・玉にして投げる
・二つの素材の質感の対比 ・いろいろな色がほしくなる感覚を自然に喚起するために，ランダムな一色のみの針のホッチキスを配る	・真っ白なスチレンボードに色の付いたホッチキスの針を打ち込んで見せる	・はじめは一色の芯のみを使わせ，色への要求が自然と生まれるようにする ・いろいろな色のホッチキスの芯を用意しておく	・打ちこまれた針の色のリズム
・わりばしの直線的な重なりからうまれる緊張感をもった美しさ	・「今日はわりばしパワーを集めます」の声かけをして，一束のわりばしにボンドを付けて置いて見せる	・大量のボンドと大量のわりばしを用意	・上へ横へ（方向性） ・もっとたくさん（ボリューム） ・わりばしの重なり
・小さい行為の積み重ね ・墨のもつ質感，におい ・一瞬の変化 ・黒と白のかけひき	・ガムテープの小さな破片を板に一枚貼ってみせる ・墨汁で黒くするときは言葉のみで実際の行為は説明の時には見せない	・一瞬の変化の後もさらに試行錯誤が可能な素材と技法を選択	・中から外へ，隅から中心へなどいろいろな貼り方 ・貼るテープの大きさを変える ・ふき取り方による色や質感の変化
・熱でものの形が変容していくおもしろさを感じることができるようにする	・一本の荷造りテープを熱して変形させていく様子を見せる	・熱によって変形しそうないろいろな身の回りにある素材を各種用意	・いろいろなものを熱して変形させる ・合体させる ・包み込ませる

Ⅲ　B 分 科 会 報 告

サブテーマ

想像力と構想力を発揮する題材の工夫

・素材の組み合わせ方の工夫

・素材を生かしてイメージを広げる

1.　B分科会の概要

子供たちは，元来，思ったことや，感じたことを何らかの方法で，表現したいという欲求をもっているものである。自分の思ったことや，感じたことを，色や形に表すことは，それだけで表現欲求を満足させ，その喜びと，楽しみを味わうことができる。

しかし，自分の思いや感じたことを，自由に表すためには，創造的な想像力と，構想力や，計画性が必要となる。そこで，B分科会では，素材とのかかわりを深めていく過程で，自分らしい想像力を働かせ，表し方などの構想を練りながら，子供なりに美しさを求めた創造活動ができる題材の開発を目指した。題材を開発するに当たっては，B分科会のサブテーマに迫るために，いくつかの具体的条件を設定し，題材を決定した。また，あえて，造形活動のまとめとしての作品を重視し，子供たちの思いを損なう事なく，教師側が見通しを立てて支援していくことを考えた。

＜素材の組み合わせ方の工夫＞

①身近な素材

②想像力と構想力を発揮させる素材の組み合わせ

①については，特に素材そのものに目新しさを求めるのではなく，身近にある素材を扱うことにした。②に関しては，複数の素材とかかわる過程で，想像や構想のイメージが生まれ，表現が膨らむことを期待した。さらに，①及び②の条件を設定したことで，素材や技法の新鮮さではなく，造形的な創造活動の深まりを目指すことにした。

＜素材を生かしイメージを広げる＞

①子供たちが，素材とのかかわりの中で，イメージを広げられる導入の工夫

②子供たちが，活動を発展させるための場の設定や展開の工夫

導入段階においての教師の働きかけは，その後の授業展開に大きな影響がある。子供たちが素材とのかかわりの中からイメージを広げ，造形活動を行うためにも，教師側は，導入時に見通しのある提案をしなければならない。さらにここでは，造形活動のまとめまでを見通した提案であることが望ましい。

場の設定や展開の工夫では，子供たちが絶えずイメージを広げられるよう，図工室以外での活動や，身近な素材と自分なりの技能による，発展性や意外性のある造形活動を提案した。

これらの提案により，B分科会では，一人一人の子供たちが，個性的な表現活動の完成へと発展することをねらった。

2. その他の実践事例

B分科会でも，研究報告にのせた三つの授業報告のほかに，さらにいくつかの授業研究を行なった。B分科会のテーマに基づき，創造活動の深まりと，造形活動の完成を目指した授業研究となった。

3年　ふしぎな器から　ゆらめき　きらめき　指導：足立区立千寿第三小学校教諭　藤島久子

この題材はB分科会のテーマに合わせ，流れなど計画的に見通しを立てたものにした。

①日頃から廃品（この場合，貼るとおもしろい，美しいと感じられるもの）を収集する。

②実際に器をながめ，魔法の器を想像し，八ツ切りのレモン色の色画用紙いっぱいに，クレヨンでカラフルに描いて，切り取る。

③4人一組になって，黒い画用紙（全紙大）の好きな場所に貼る。そこから白色クレヨンで煙が出るようにもくもくと描いて陣地をとる。器も煙も，一時ボンドをかけて消してしまう。

④選んで集めた素材を思い思いに工夫して，煙の部分に貼り付けていく。

この題材では，くぎりくぎりでその都度導入に工夫，次への期待をもたせた。また，異なる素材の組み合わせで，子供たちのイメージはどんどん膨らみ，豊かな発想へとつながり，その子のよさが出た。

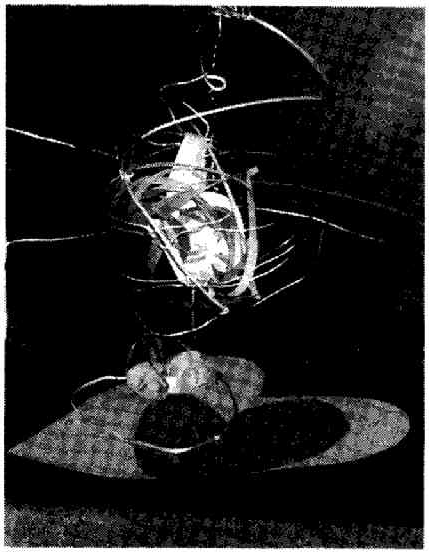
6年　いろいろ曲線人体模型　　指導：大田区立小池小学校教諭　山田和也

B分科会のテーマである「素材の組み合わせのよさを生かし想像力と構想力を発揮する題材の工夫」を受け，今回の授業を進めた。

①アルミ線できれいな曲線を作る。平面的なものではなく，立体的に作れるようにいくつかのアルミ線を組み合わせて作っていく。

②2㎝～5㎝幅の色画用紙を自由に選ばせ，その立体を身体のどこかの部分と考え作っていく。もとになるアルミ線の形をいろいろな角度から見てイメージし，身体のどの部分（手，足，指，ひざ，ひじ，目，鼻，口，耳，脳，心臓，肺）が作れるか形を見つける。

③自分が見つけた体の部分になるように工夫する。アルミ線の変形や追加も認める。色と形でその子なりの考えやイメージでそれぞれ耳や心臓などに形作られていく。子供たちは見た目の色や形にとらわれがちであったが，アルミ線のしなやかで力強い曲線に助けられ，概念的なものでなく，その子なりのイメージの広がりが見られる作品ができ上がった。



作る部分によって，平面的なものや，立体的なもの，シンプルなものや複雑なもの，色鮮やかな作品など，一人一人が様々な思いで形作るおもしろさを楽しむことができた。

3. 実践事例（B分科会）

(1) 題材名　「メイド　イン　パリッパリッ」　低学年（第2学年）

副題　思うようには割れないけれど，パリッパリッシャーシャーペッタンコ

1. 題材設定とねらいについて

低学年の場合，何よりも楽しい雰囲気が生まれる素材であることを重視した。しかも，短時間で完成でき，個人の多様性が発揮できること，その上，子供なりに美しさを求めた造形活動となるよう，本題材を設定した。

素材としての発泡スチロールは，堅くもなく柔らかくもない独特の質感で，割れる時の，パリッパリッという感触は，子供たちの手に新鮮な感動を与えるだろう。さらに，発泡スチロールの白い色が創り出す影とのハーモニーは，子供たちを美しい造形活動へと導くに違いない。

また，発泡スチロールの特性（軽い）や独特の質感から，完成後，一人一人が展示する際にも壁や台面など好きな場所に自由に展示でき，興味深く鑑賞できる。

2. 学習の流れ（1時間）

教師の働きかけ	子供の活動
①「この白い板で何をしようかな？」 約90×180㌢（厚さ1㌢）の大きな発泡スチロール板を，頭と両手で約2等分大に割る。 さらに等分に割って，約45×45㌢大にして，児童に手渡す。	興味深くながめる。 音を出しながら割られていく板を見て，自分も早くその板を割ってみたいという思いが出てくる。
②「みんなも自由に割ってみようか！」 「自分の両手や頭を使って，おもしろい形に割ってみよう！」	わいわいと歓声をあげながら割っていく。
③「これからどうしようかな？この板に色を塗ったり，貼ったりして，何かつくりたいね。自由にやってみよう。」 自分の課題を見つけられるよう導く。	白ボール紙に板を構成し始める。 クレヨンで色を塗ったり描いたりしてからボンドで貼っていく。

3. 評価

・単純な行為から生まれた「割る」「描く」「貼る」のプロセスを楽しめたか。

・自分の思い（イメージ）が表現できたか。

4.　材料・用具

教　師：発泡スチロール（９０×１８０㌢厚さ１㌢），ボンド

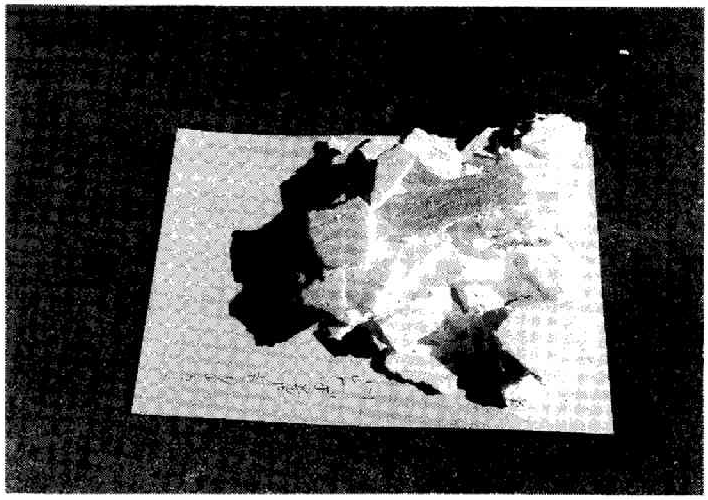
子　供：クレヨン

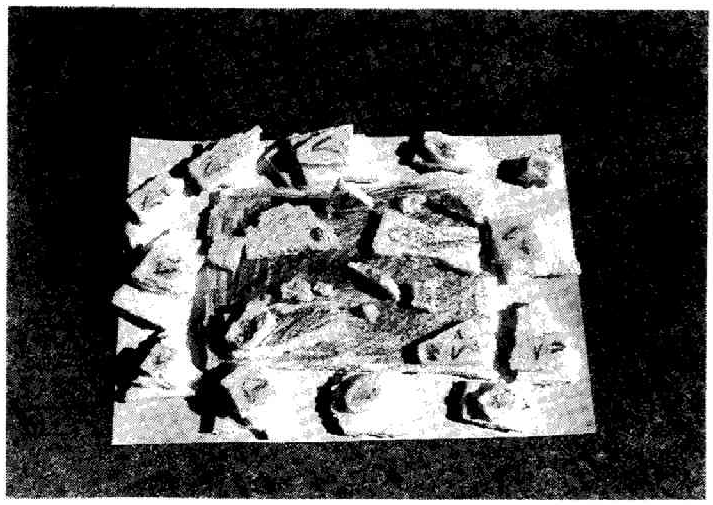
5.　考察

低学年の場合は，特に素材の感触を楽しめるものが重要となる。本題材は，独特の音を伴い，指の先まで造形しようとする神経が走っていくことにより，全身を使って自由に形ができていく楽しさと喜びが味わえた。

本題材の素材，発泡スチロールは，廃材を利用する方法もあるが，子供に同じ条件で材料を提供したいと考え新しいものを用意した。また，廃材では大きなものがあまりなく，独特のパリッとした感触が味わえない，さらに，小さいものや分厚いものだと子供たちの力で割るのは困難である。今回の題材では，パリッという感触を味わわせることを重視したのでこの厚さ１センチの板が適切であった。

また，クレヨンでの着色は発泡スチロールの表面では発色が美しく，クレヨンは子供たちにとっても非常に扱い易い描材である。さらに，着色しながら造形活動が進められるという点からも適した題材と用具であったと考えられる。





(2) 題材名　「10才の指で水を表す」　中学年（第４学年）

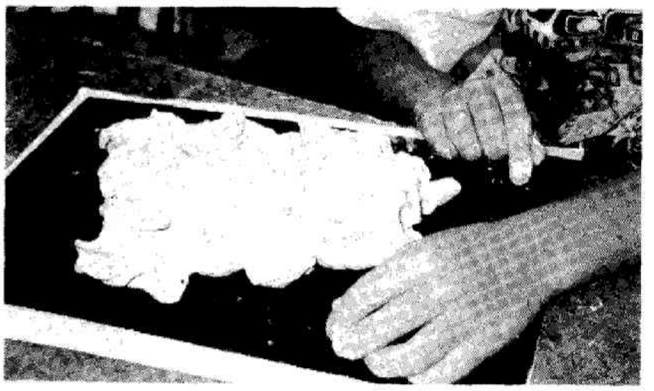
副題　子供だったことを忘れないためのレリーフ

1. 題材設定とねらいについて

今回の題材は，人工ねんどを使って自分の指だけで「水」を表す題材である。「水」は，目に見えるにもかかわらず，実体としてつかめずイメージにたよるところが多い。自分のもつイメージを自分の指だけで表そうとすることは，限られた条件の中で発想を駆使し，自分ならではの技法も発見しなければ，表現できないだろうと考え，本題材を設定した。さらに，人工ねんどで水を作るという，身近な素材で意外な造形活動を展開することで，題材の新鮮さをねらった。

また，10才の指の大きさや動きをレリーフとして残すことで，子供だったことの記念作品として残せるようにという，指導者の願いから副題を添えた。その結果，残したいという気持ちをもつことができるようにするためにも，子供なりに美しさを求めた造形活動のまとめを重視した。

2. 学習の流れ（４時間）

	第一次（０．５時間）	第二次（０．５時間）
教師の働きかけ	場所・図工室 ○材料の提示 ・あらかじめ白又は，黒に塗られた板 ・人工ねんど ・ねんどを仕切るのに使うタコ糸 ○「ねんどで水を表したレリーフと言うものを作ります。」 ○資料の提示	ウォーミングアップ（ねんどで遊ぼう） ○指だけでもいろいろな形や模様ができることを提案 ○ねんどの固さの調節（水の加え方等） ◇ねんどの感触を指で感じながら，活動を楽しむ 
子供の活動	◇材料と「レリーフ」認知 ◇好きな板を選ぶ	

3. 評価

・限られた条件の中で，イメージを表現することを楽しむ。

・人工ねんどの感触を指で感じ取りながら，触覚的な感覚を表現活動に生かす。

・自分の指だけで，自分らしい技法を発見する。

4. 材料・用具

教　師：ベニヤ板，人工ねんど，タコ糸，塗料，取り付け金具。

子　供：水彩用具一式。

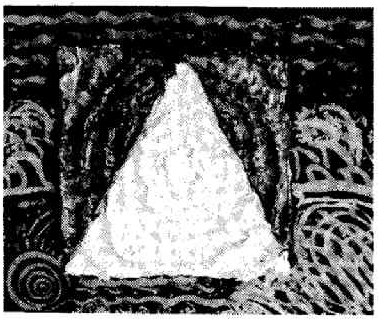
5. 考察

子供たちは，「水の表情を感じる」や「指だけを使って，ねんどで水を表現しよう」などといった教師の投げかけに対しても，非常に伸び伸びと表現していた。しかし，授業後の協議会でも，造形活動のまとめの方法が議論の対象となった。

①ねんどの分割の必要性。（授業者は，ねんどによる水の表現に対して，水面から水を切り取った状態をイメージして題材を設定した）

②土台の着色及び，装飾の必要性。（少しでも長く残してもらえるようにという願いから）

子供なりの美しさを追求することの難しさと問題点が今後の課題として残った。

第三次（1時間）	第四次（1時間）	第五次（1時間）
場所・プール ○「ねんどをもってプールへいこう。」 ○「水に表情をつけよう。」	場所・図工室 ○水面から水を切り取った状態をイメージさせ，その形を板の上にタコ糸を張って表すようにする	○着色及び，装飾の方法を提案する
◇水の表情を探る ◇ねんどでスケッチ 	◇プールサイドでのスケッチを思い出したり，イメージを膨らませたりしながら，板の上にねんどで水を表す 	◇土台の板に色を塗ったり，模様を描いたりする

(3) 題材名　「はってはって，やぶいてやぶいて」　高学年（第６学年）

1. 題材設定とねらいについて

この題材は，色画用紙を台紙に貼り，その上からローラーで絵の具を着色し，再び貼った色画用紙を剝がしながら，一人一人の思いに近づけていく活動である。

色画用紙を貼っていく行為と剝がしていく行為の両者とも造形的な行為としてとらえ，子供が試行錯誤の中で自分自身の表現の楽しみを味わうことをねらいとした。

素材としては，紙と絵の具だけとし，子供にとって身近な素材を選定した。二つの素材に子供がどうかかわり，色と形が織りなす造形の美しさをどのように感じ，表現の喜びに結びつけていくことができるかについて，特に着目して授業を進めた。

2. 学習の流れ

	第１次（１時間）	（２時間）
教師の働きかけ	・色画用紙を貼ったり剝がしたり，着色しながら作品を作っていくことを提案する。 ・何か特別の形を意識せずに色画用紙を切ったり，ちぎったりして作品を作っていくことを提案する。	・はさみで切っても，手で破ってもよいことを提案する。 ・糊は薄めに付けることを助言する。 ・色画用紙の色の組み合わせについては神経質にならなくてもよいことを助言する。
子供の活動	・どのように作品を作っていくか見通しをもつ。 ・偶然にできた色画用紙の色と形を見ながら，重ねるなどの工夫をして貼っていく。	・どのような色や形にしようかと試行錯誤を繰り返す。

＜もっと重ねてみようかな？＞

＜次はどうしようかな？＞

＜ローラーでインクを付けてみよう！＞

3. 材料用具

教師：色画用紙，のり，はさみ，カッターナイフ

子供：版画用ローラー，版画用絵の具，新聞紙

	第２次（３時間）	（４時間）
教師の働きかけ	・版画用ローラーに絵の具を付け，画面に着色することを提案する。 ・絵の具は何色使用してもよいことを提案する。	・貼った紙を部分的に剝がしたりすることにより新たな効果が出ることに気付くように参考作品を用意する。 ・ローラーで着色した後に，剝がしていく効果にも気付くことができるようにする。 ・再度，色画用紙を貼ってもよいことを提案する。
子供の活動	・ローラーの効果を生かしながら着色していく。 ・ローラーの重なりや混色等の工夫を試みる。	・貼ったり剝がしたり，色を重ねたりと，各自のイメージを大切にしながら様々な方法を試してみる。 ・自分の思いやイメージに合うところで，活動のまとめを行う。

4. 考察

授業の始めに，紙の貼り方について「何か特別の形でない形を作っていくんだよ。」と提案した時，とまどっている様子が明らかに感じられた。子供たちにとっては，何かの形をイメージしながら作ることが，比較的多く，しかも取り組みやすいからではないかと推察された。

しかし，実際の活動の場面では，子供一人一人が自分の思いを具現化するために，始めの不安を忘れたように様々な工夫を行っていた。色画用紙を台紙に無造作に貼る，重ねて貼る，計画的，意図的に貼るなど手探りながらも着実に活動は進んだ。

具体的な場面で，教師の予想と若干異なる様相が見られたのは，一度貼った色画用紙を剝がしていく活動において，子供が積極的にはならなかった点であった。やはり活動としてのまとめ方に不安があるのではないかと感じられた。また，活動の結果としての作品に対する見通しがもちにくかったことが考えられた。ローラーによる着色の段階に入ってダイナミックな活動が見られ，色と美しい形が変化しながら現れる様子に，子供は我を忘れて次の着色の構想を練っていた。この段階あたりから，「はってはって，やぶいてやぶいて」のねらいどおりの活動が見られ，大きな成果を得られた。

4. 主題に迫るための視点一覧表

題材視の点 ＼ 教材名	素材の組み合わせ方の工夫 身近な素材	素材の組み合わせ方の工夫 どのように想像力と構想力を発揮できるようにするか
メイド　イン パリッ　パリッ （2年）	薄い発泡スチロール板を白い厚ボール紙の上に構成する。 クレヨンで着彩してもしなくても良く，木工用ボンドで接着する。	道具を使用せず，自分の両手だけで発泡スチロールを割っていく。すると，思うようには割れてくれない。しかし，軽やかな音を発するので何だか楽しくなる。何か作れそうなムードになっていく。
ふしぎな器から ゆらめき きらめき （3年）	・八ツ切り画用紙（黄） ・全紙画用紙　（黒） ※4人に1枚 ・クレヨン ・できるだけ美しい身の回りの不用品（ボンド，菓子の包み紙，ひも，ビーズなど）	・色々な形の壺，びん，ランプなどの器を想像して描く。 ・中から，ゆらゆら煙が吹き出してくることを想像する。（バランスよく煙を入れる） ・煙と共にゆらゆらきらきらと何が吹き出てくるか，飛び出してくるかを想像する。
指で水を表す （4年）	合板の上に粘土で，指だけを使って，水を表す。	・想像力を生かし，水に対する自分のイメージを指だけで表現する。 ・限られた条件の中で，想像力を駆使し，造形活動を完成する。
いろいろ曲線 人体模型 （6年）	・アルミ線 ・できるだけたくさんの色の色画用紙 ・エポキシ系ボンド ・ホッチキス ・のり	・自分の身体にあるが，日常あまり意識していないものを想像しながら形にする。 ・アルミ線のもつ力強く，しなやかな感触を味わう。 ・アルミ線の見えてくる形と，作りたい身体の部分にイメージが近づくよう，色画用紙の色と形で造形を楽しむ。
はってはって， やぶいて やぶいて （6年）	画用紙に色画用紙を貼り版画用ローラーに絵の具をつけて転がす。 次に，色画用紙を破っていく。	・色画用紙を貼ったり破ったりローラーで着色することによる色と形の変化から，想像力を発揮する。 ・色画用紙を貼ったり破ったり着色したりするという行為の繰り返しの中から，想像力を発揮する。

教師の働きかけ	素材を生かしてイメージを広げる		活動の発展
見通しのある提案	導入時の工夫	子供が活動を発展させるための場の設定や展開の工夫	どのような発展が見られたか
素材に対する体力や技能が十分に伴なわなくても，自由に造形活動ができることを認識し，短時間で構成できること。	発泡スチロールの素材は非常に軽く，簡単に割れる。楽しい音がする，2枚重ねて割ることもできる。額を使って両手で割ったり，空手チョップで割っても良い。割ることの楽しさを味わうことができるようにする。	発泡スチロールを重ねていくと，美しい陰影が生じることを発見できるようにする。白い素材がクレヨンで着彩すると鮮明な色を発する，そんな各自のイメージに繋げていけるようにする。	児童の思い通りに割れないが，各自のイメージが自然に生まれ，立体的なものになったり，レリーフ状になったりした。クレヨンを使わなくても十分楽しめる作品もできた。
・器を描き，切って貼ること。 ・煙を出して陣地取りをすること。 ・色々な素材に触れてみることから，驚くようなものを発想しようとすること。	・実際に色々な形の器を見せて，自分の魔法の器を想像できるようにする。 ・始めにすべて導入してしまうのではなく，その都度，次はどういうふうに展開していくかという新鮮な思いで取り組めるようにする。	2週間ほど前から，貼ったり，くっつけたりできる不用品を収集しておくようにする。	・器の形を考えたり，色を付けたりという楽しさを味わえた。 ・種々の素材に触れ，それが，どんなものに変身していくのかというイメージを広げられた。
板状の画面構成を考えて，切り取られた水のように表すこと。	まず，ねんどの感触を指で感じ取りながら，触覚的な感覚を楽しめるようにする。	・プールにて水の表情を探るようにする。 ・水に表情を与える。 ・ねんどによる水のスケッチをする。	・水のさまざまな表情から想像力を膨らませることができた。 ・造形活動を完成させるために，構想力を発揮できた。
・自分で美しく作り出したアルミ線の形を色々な角度から見て，作りたい身体の部分を探しやすくすること。 ・具体的な形にこだわらず，自分のイメージで作ること。	・与えた素材で何を作るかは具体的に伝えず，アルミ線で形作らせ，後の具体的な作業に意外性をもつことができるようにする。 ・立体にしても平面にしてもよいことを提案する。	・置く，つるす，掛けるなどのスタイルでも制作ができるようにする。 ・立体，平面作品のどちらも認める。 ・できるだけたくさんの色画用紙を準備する。	・自分の作ったアルミ線の形を，色々な角度から見ることで身体の部分をイメージすることができた。 ・立体，平面，半立体とそれぞれのスタイルの作品ができた。
紙を貼ったり破ったりする行為の繰り返しの中で，自分の作りたいイメージを明確にしていくこと。	最初に色画用紙を貼る時は自由にはさみで切ったり破ったりする行為自体を楽しむようにする。	・版画用ローラーに絵の具を付け，作品の上に転がす。 ・着色した画面を見て自分のイメージになるように紙を破る。	色と形と全体の雰囲気の試行錯誤の中から自分なりのイメージを明確にできた。

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題

1.　研究のまとめ

研究主題やA・B分科会テーマに基づいて考察し，以下の点が明らかになった。

・現代の子供たちの感性に合っていると思われる題材や素材を提示することによって，子供たちは授業への興味をもつことができた。

・扱いやすい素材，平易な技法を用いることによって，子供たちは表現意欲がわき，多様な表現を展開することができた。

・教師が，子供の表現を理解し，よいところを認めていこうという姿勢でかかわった時，子供たちは安心して自分らしさを発揮し，喜び，楽しみながら活動することができた。

A分科会「直感力や感覚を刺激する題材の工夫」

・身近で扱いやすく，感触的かつ感覚的な要素をもつ素材を探り提示することによって，子供たちは素直に素材を受け入れ，直感力や感覚を発揮し，全身で感触を楽しんだり緊張感をもったりして活動を展開することができた。

・導入時に，素材の思いがけない変化や使い方など，子供の感覚を刺激する出会いを工夫し説明要素を絞った提示の仕方をしたことにより，子供たちは積極的に素材とかかわった。

・活動過程で子供たちの予期せぬ方法を使ったり，素材を一瞬に変化させたり，場の設定を工夫したりすることによって，子供たちの感覚は刺激を受け，その子供なりの活動を展開し楽しむことができた。

B分科会「想像力と構想力を発揮する題材の工夫」

・身近な素材を選び出し，素材とのかかわりを深めていく中で，子供たちは，自分らしい想像力を働かせ，素材の組み合わせ方の工夫によって新鮮で新しい造形感覚を味わった。

・子供たちは，素材から受けたイメージを広げ，題材に合わせて構想力を高め，自分なりの技能で主体的に発展性のある造形活動を展開することができた。

・いくつかの具体的な制約のある条件を提示し，場の設定や展開の工夫をすることによって子供たちは，積極的に素材と取り組み，意外性のある表現活動を楽しむことができた。

2.　今後の課題

子供が個性を生かし，表現活動を喜び楽しむことを主題に研究を進めてきたが，一つ一つの実践のつながりや小学校6年間での位置という観点からもとらえていくことが必要である。そのことが，より創造力を高め，想像力を多様にしていく等，次の研究に発展していくと考える。しかし，これらの実践事例も，子供の教育環境としての教師の明確な思いがなければ生きた教育とはならない。教師が子供の立場で絶えず研究する姿勢があるからこそ，その思いに触発され，子供たちは表現意欲をわかせることができると考える。今回，二つの視点にしぼって研究を進め上記のように一定の成果を確認できた。今後も子供一人一人の表現意欲を十分に満足させることにより，喜んで表現を楽しむことができるよう，他の視点からも指導法の工夫について検討していくことが必要である。